

地平を融合させる対話としてのテーマ分析法

伊 賀 光 屋

本稿では、前稿（伊賀，2009a）を承けて、解釈学的現象学の方法論に最も叶った「テーマ分析法」という質的データの分析法について論じる。このテーマ分析法は、様々な哲学的前提や方法論のもとで広く用いられている。たとえば、I.Holloway & L.Todres（2003）は、テーマ分析法が質的な諸方法論で汎用に用いられる分析技法であると言う。また、R.E.Boyatzis（1998）や G.W.Ryan & H.R.Bernard（2000）もそうした立場に立っている。

それに対して、V.Braun & V.Clarke（2006）はテーマ分析を他の分析方法からは独立した一つの方法で、解釈学的立場と親和性のある方法として考えている。我々も、テーマ分析は解釈学的方法に最適のテキスト分析技法であると考えている。何故そのようにいえるのかを論じることが本稿の主な目的であるが、その議論の前に、テーマ分析がどのようなものであり、またテーマ分析にはどのようなアプローチが存在しているのかを明らかにする必要がある。

第一節ではテーマ分析、テーマ、そしてコードとは何を明らかにし、テーマ分析に様々なアプローチがあることを明らかにする。第二節では、実証主義的な仮説演繹法と親和的な理論駆動型コード開発法（テンプレート分析）について論じる。第三節では、理論駆動型とデータ駆動型の両者を折衷した先行研究駆動型コード開発法について論じる。第四節では、解釈学的立場で広く用いられているデータ駆動型コード開発（編集整理法）について論じる。そして、第五節ではライアンらの実用的なテーマ発見の方法について論じる。最後の第六節ではファン・マーネンの解釈学的テーマ分析法についてふれ、それと対比させながら、ガダマーに依拠した「地平を融合させる対話としてのテーマ分析法」を提示したい。

I テーマ分析とコード開発

(1) テーマ分析とは何か？

テーマ分析は、実証的パラダイムから解釈学的パラダイムにいたる様々な方法論的立場で共通に用いられてきた質的情報（テキスト）を解読（encoding）するプロセスである。それは質的情報に対する一つの見方である。また、一見するとでたらめに見える質的情報を体系的に観察し、理解し、分析し、あるいはそれを量的データに変換する方法であるといわれる。

質的情報を解読するためには明示的な「コード」（code）が必要である。コードとは諸テーマの一覧表か、因果的に関係づけられた諸テーマ、諸指標、諸条件を含んだ複雑なモデルのことである。コードは質的情報を整理し加工し分析するための変換手段である。コードは後で述べる理論駆動型コードの場合には概念図式であり得るが、データ駆動型コードの場合にはその前段階の結束性や一貫性によってひとまとまりの部分と認識される意味単位（テキストの一部）を分類するための装置である。Coffey & Atkinson（1996）は「コーディングとはデータをそれについてのわれわれの観念に関係づける仕方」だと言っている。

次に、テーマ（theme）とは質的情報の中に見出されたパターン（意味単位、モチーフの基本型）のことで、最低でも観察結果を記述し編集して、うまくいっていればその現象の諸側面を解釈したものである。テーマ分析には三つの段階がある。

- ① 質的情報の中に意味単位のパターンを発見する（テキストの各部分が何について書かれているのかを解読する）段階。
- ② 意味単位のパターンに名称や定義、記述を与え、パターンを分類するためのコードを作成し、そのコードのよって情報を解読する段階。
- ③ パターンを解釈する段階。

テーマ分析自体はどのような存在論、認識論、パラダイムをもつ研究者にも利用可能な汎用的分析方法であるが、現象学的方法論を採用する心理学者、看護学者、社会学者などが好んで用いている。

(2) コード開発の三つのアプローチ

コード開発には三つのアプローチがあるとされる。**理論駆動型** (theory-driven)、**先行データ・先行研究駆動型** (prior data or prior research driven)、**データ駆動型** (data-driven) の各アプローチである (R.E. Boyatzis, 1998)。

これらの各アプローチは理論駆動型とデータ駆動型を両極端とする連続帯を構成し、データ駆動型に向かうほどコードの不確実性や曖昧さ、研究者の不快感、コード開発にかかる時間が増大していき、逆にコード評定者間の信頼性が増大し、また基準に反するコードや可変的コードの構築の可能性が高まると言われる。

それぞれのアプローチに対応したコード開発法は次の三つの方法である (W.L. Miller & B.F. Crabtree, 1999)。アプローチ別の大まかなテーマ分析の流れは図1のようになる。

段階	理論駆動型・先行研究駆動型アプローチ	データ駆動型アプローチ
I	サンプリングと設計	1. サンプリングと設計 2. サブサンプルの選定
II	テーマとコードの開発 1. 理論 or 先行研究からコード作成 2. 生の情報に適用しうるようにコードを改訂する 3. 信頼性の検証	1. 生の情報の縮減 2. サブサンプル内でのテーマの識別 3. サブサンプル間でのテーマの比較 4. コードの作成 5. 信頼性の検証
III	コードの妥当性の検証と使用 1. 生の情報へのコードの適用 2. 妥当性の検証 3. 結果の解釈	1. 残りの生の情報へのコードの適用 2. 妥当性の検証 3. 結果の解釈

図1. アプローチ別のテーマ分析プロセスの流れ

① **理論駆動型コード開発法**；理論駆動型アプローチは、研究者が信奉する理論に合致するようにテーマ・コードを開発する。すなわち理論的概念や命題に当てはまるコードを演繹的に作り出し、データに当てはめる。理論に基づき先験的に諸コードの定義を行い、そのコード一覧表をデータに適用する。**テンプレート整理法**は理論駆動型コード開発法の一つである。

② **先行研究駆動型コード開発法**；先行研究駆動型アプローチでは、同じ分野の先行研究を参考にコードを開発し、仮説検証的に手持ちのデータに適用する。すなわち先行研究の開発した諸コードを最初に用い、手持ちのデータの分析を行いながらコード一覧表を修正、改訂していく。先行研究駆動型は**テンプレート分析**と**編集整理法**とを折衷したものである。

③ **データ駆動型コード開発法**；データ駆動型アプローチは、手持ちのデータからテーマが発見できるようにコードを帰納的に開発する。すなわち、生の情報に含まれる言葉や統辞（構文）からコードを作り出し、それに基づいてすべてのデータをコーディングする中で、最初の諸コードを修正拡大していく。

なお、このほかに、C.Moustakas (1990) らの**没頭／結晶化整理法**がある。この方法では、データの整理と諸テーマの発見およびそれらの関係づけの過程が、データへの没入（集中）作業とデータから離れて休息する間に諸テーマやそれらの間の関係についてのアイデアを孵化させる作業を交互に繰り返しながら、諸テーマとそれらの間の関係およびそれらについての解説を結晶化させていく。没頭／結晶化整理法は一種の編集整理法といえる。ただしこの方法は内観法と結びつくことが多い。

(3) 有用なコードの要素

良いテーマ・コードとはその現象の質的豊かさを捉えることの出来るコードである。そしてこれには次の五つの要素が含まれると言われる (R.E.Boyatzis, 1998)。

- ① **テーマの名称**（名称は研究している現象に対して概念的に意味があり、可能な限り明瞭簡潔に本質を伝え、データに忠実である必要がある）。
- ② **テーマの定義**（テーマを群化させている特性や問題）。
- ③ **テーマを浮上させたテキスト部分の例示**（テーマが浮上してきた時をどのように知ったかの記述）。
- ④ テーマを識別するための**条件や除外規則**の記述
- ⑤ テーマ探査中の混乱を減らすための、**該当例や非該当例**。

次に、テンプレート整理法、先行研究駆動型、編集整理法の順に、その特徴とテーマ分析の手続きの諸段階についてみてみよう。

II テンプレート整理法

(1) テンプレート分析におけるテーマとコード

理論駆動型コード開発法は社会科学研究の中で最も頻繁に用いられるアプローチである。研究者は自分の理論から始めて、この理論を支持する証拠の指標を練り上げる。コードの諸要素は理論仮説や概念から導き出される。研究者は情報を処理し、分析するのに誰かのコードや枠組みを用いる。実験心理学、比較人類学、実証主義社会学では理論駆動型コードが広く用いられている。理論駆動型アプローチのテーマとコード開発では次の三つのステップがある。

- ① **ステップ1：コードの作成**；理論やこれまでの発見，そしてこれまでの研究で用いられたコードを再読し，熟考してテーマ一覧表を作成する
- ② **ステップ2：生の情報の文脈の中でのコードの検閲と改訂**；第一ステップで浮上した諸テーマとコードを検閲し，必要に応じて書き直す。この際に一番留意すべき点は，諸テーマが適用しようとしている生の情報に適合しているかどうかを確認することである。同じ情報を分析している他の研究者の誰もが理解できる言葉，統辞法，体裁をそれらの諸テーマが有しているかどうかをチェックする必要がある。
- ③ **ステップ3：コードの信頼性の確定**；コード作成者とコードの信頼性を見極める。

理論駆動型アプローチの一例が Miller & Crabtree (1992) の**テンプレート分析技法**である。テンプレート分析とは質的データに対して行うテーマ分析の一手法のことである。対象となるデータはインタビューの書写の他に、日記の記載事項、電子的インタビューから得られたテキスト、あるいは質問紙への自由回答などのような種類のテキストでもよい。最も広く用いられているテンプレートは“Outline of Cultural Materials” (Murdock et al., 1950) であろう。これは HRAF (Human Relations Area Files, エール大で管理している世界各地の民族誌テキスト約400件をマイクロフィッシュ約350万枚に収録したもので、世界各国の大学図書館に収蔵されている。日本では京都大学付属図書館などが収蔵している) のデータを分類するため

にマードックが作成した分類表である。コードは二段階のヒエラルキーをなし、888分類されている。たとえば、24 Agriculture 244 Vegetable Productionとなっていたり、61 Kin Groups 613 Lineagesとなっている。これらのコードを用いて、民族誌のテキストの余白にテキストの内容(テーマ)をボブコードを書き込んである。たとえば世界中の単系の血縁親族組織の分布に関心があれば、各民族誌のテキストの余白の613, 614, 615を探し、その記述を抜き出していけばよい。

テンプレート・アプローチでは、**テンプレート(コード一覧表)**を作ってそれに基づき、テキスト内のテーマを発見して表示する。テーマの中には先験的に定義づけられたものもあるが、テキストの解釈が進むにつれて修正されたり、付け加えられたりする。

テンプレート・アプローチは予めコードがすべて決められ、その分布を統計的に分析する**内容分析(content analysis)**と先験的にはコードを定義づけない**グラウンデッド・セオリー**との中間に位置しているとも言われる。また、この分析技法はどのような認識論やパラダイムを採用する研究者も用いることが出来る汎用の技法であると言われる。テンプレート分析を用いる者には「穏やかに探し回る論理実証主義」(Miles & Huberman, 1984)から純粋な現象学的立場(Hycner, 1985)までいる。グラウンデッド・セオリーを用いる人々は参与者たちの「実在の」信念、態度、価値などを発見するためにコード化を行うが、社会構築主義(Burr, 1995)や現象学(Kvale, 1983)の見解に近い質的研究者は「実在の」内的状態を疑い、それ故にテンプレート分析を採用する。

テンプレート分析においては、テーマとコードは次のように捉えられている。

テーマ(themes)とは、話者の特定の経験や知覚について述べた彼等自身の話の中の、研究者が研究上の問と関連があると認めた、諸特徴のことであるとされる。

また、**コード(code)**とは、研究者が解釈上重要と認めた、テーマや論点と関係するテキストの一部分を指示するために、そこに付けられた**標号(分類名 label)**であるとされる。コードは本質的に記述的で、話者が意味した内容を研究者が判断する必要が全くないものもあるが、多くの場合解釈的で定義するのが難しい。

テンプレート分析では、類似したコードからなる**グループを一括りにして、より一般的な高次のコードを作っていくようにして、諸コードを階層的に編成する**。大まかな高次のコードはインタビューの一般的方向を概観でき、詳細な低次のコードは事例内と事例間の両方で、よりきめ細かな区別を可能とする。しかし、ほとんどのテンプレート分析は2~4段階の階層化でとどめる。階層化のレベルが多すぎるとデータの編集と解釈が明晰性を書くことになる。

テンプレート分析は通常、テキスト内の各部分を同時に平行してコーディングすることを許している。これを**パラレル・コーディング**という。つまり、テキストの同じ部分が同じレベルの二つ以上の異なるコードに同時に分類されることがある。このような同じテキスト部分の複数コーディングは内容分析では許されない。

(2) テンプレートの展開

もともと **template** とは倣い研削盤などで研削加工するときの原型となる**型板**のことである。テキスト内の記述でテーマに合致する部分をこのテンプレートと呼ばれるコードで検索するのがテンプレート分析法である。B.F. Crabtree & W.L. Miller (1999)によれば、テンプレート分析は次の諸段階を踏む。

- ① 諸コードを定義づけ、テンプレート(コード一覧表)を作成する。
- ② テンプレートを用いてテキストをコーディングする。
- ③ コードを目印にして類似の記述があるテキスト断片を選び分ける(ソーティング)
- ④ 諸断片を熟読し、それらを結合してテーマを発見する。
- ⑤ 発見された諸テーマを補強し正当化する。
- ⑥ 発見された諸テーマに解釈を加え、論文を書く。

また、King が示したテンプレート分析のプロセスは図2のようなステップを踏む。この中で、最初のテンプレートの作成とテンプレートの改訂について詳しく見てみよう。

- ① インタビューを実施する。
- ② トランスクリプトを作成する。
- ③ テキストを隈無く読む。
- ④ テキスト内の記述でテーマに関連した部分を探し出し、先験的コードを用いてコードを付す。
- ⑤ 先験的コードにないテーマについては追加のアフター・コードを付ける。
- ⑥ 最初の3～15程度のトランスクリプトに対してこの作業を実行し、この間に不適切なコードが発見されたら修正や削除を行う。
又、新たなテーマが発見されれば追加のコードを加える。
- ⑦ このプロセスで出現した諸コードをテンプレートに出現順に記入する。
- ⑧ テンプレートに記された諸コードの中で類似したものを集め、そのクラスターに新たな名称(上位コード)を付け、コードのヒエラルキーを作っていく。
- ⑩ すべてのトランスクリプトに対して、このテンプレート(コードブック)を用いてコード化の作業を実施する。
この間にも、不適切なコードの修正、無用なコードの削除、新たなコードの追加を行う。
- ⑪ 最終的なテンプレートを完成させる。
- ⑫ これに基づいて解釈と論文作成を行う。

図2. テンプレート分析の流れ

(3) 最初のテンプレートの作成

テンプレート分析では通常、分析を導くのに役立つ少数の予め定義したコードを用いる。予め定義したコードが多すぎると、最初のテンプレートが分析の妨げとなり、逆にあまりに少なすぎると大量の豊かで複雑なデータに圧倒されて明確な方向付けが出来なくなる。

最初のテンプレートを制作するための最善の方法は、インタビューの質問項目票(topicguide；話題の手引き)からコードを作成する方法である。つまり、質問項目、探りの質問、きっかけの質問の集合を予め定義したコードとするのである。質問項目票自体は、学術文献、研究者の個人的体験、逸話的なまたインフォーマルな証拠、予備調査からの情報などから引き出され研究の実質的内容や哲学的前提に依存して組み立てられる。この質問項目票の主要な質問項目をテンプレートの成層的コード群の上位のコードとし、副次的質問や探りの質問を下位のコードとすることが出来る。この質問項目票がかなり実質的で、インタビューで聞き取る話題が予めほとんど決まっていれば、分析は効果的に行われる。(このような質問項目の実質性を保証するのは、人々のヴァナキュラーな世界の分節化の様相や特異な情緒体系などに精通していることだ。そのためには、人々が幼少期から受けた教育や躰の内容、読み慣れた本や当地のローカルな情報、業界情報などのその世界特有の情報などを提供する、地方の新聞、当時の教科書や教材、業界紙、人々の伝記、地方の民俗誌、などなどを読んでおく必要があるだろう。また古老などからの予備的な聞き取りも欠かせない。)

(4) テンプレートの改訂

この最初の予め定義したコードからなるテンプレートが出来たら、トランスクリプト全体を隅々まで体系的に読み進め、プロジェクトの目的（研究上の問）に関連性のあるテキスト部分を確認し、最初のテンプレートから一つ以上の適切なコードを用いて、その部分にコードを付ける。この過程で最初のテンプレートの不適切なところが明らかになれば、様々な変更を行う。

① **挿入**；研究上の問と関連性があるが、既存のコードのどれにも当たらないテキスト内の論点 (issue) を確認した場合には、新しいコードを作りテンプレートの適切な位置に付け加える。

② **削除**；最初に定義づけたコードが、用いる必要が無くなったり、別のテーマと実質的に重なっていることが判明した場合には削除される。

③ **範囲の変更**；あるコードがあまりに狭く定義されていたり、あるいは逆に広く定義されていて有用でないと分かった場合には、そのコードをより下位のレベルで、あるいは上位のレベルで再定義する必要がある。

④ **高次のレベルの分類替え**；もともとある高次のコード内のサブカテゴリーに分類されていたコードが、別の高次コードのサブカテゴリーに分類し直した方が良い場合には、高次分類の再編成が行われる。

III 先行研究駆動型コード

次に先行研究駆動型アプローチを見ていこう。このアプローチは Miller & Crabtree (1992) が編集的分析スタイルと呼んだものに近く、他の研究者達の先行研究や彼らが用いたデータを参考にしてコードを開発する方法である。コードの妥当性は既に確立されているので、それを適用する生の情報に併せて言葉遣いや統辞法を変更すればよい。

(1) 理論駆動型コードと先行研究駆動型コードの使用例

Boyatzis (1973, 1974, 1975, 1983) はアルコール摂取の攻撃行動への効果に関する研究の中で、理論駆動型コードと先行研究駆動型コードを併用しているので、これについてみてみよう。

段階Ⅰ：サンプリングと設計の問題

飲み屋で酒を飲んでいる男達のアルコール摂取と攻撃行動との関係を調べる目的で、マサチューセッツのケンブリッジ、ウォータータウン、サマビルの各地域で地方紙に広告を出し、被験者を募集した。現在アルコール中毒の治療中の者や健康問題を抱えている人、さらにアルコールに関して問題や暴力沙汰を起こしたことのある人を除いて、157人を対象に実験を行った。参加者は25～50歳で、職業は様々であった。参加者に心理テストを受けて貰った後に、何回か酒飲みの会合を開き、その始め、中間、終了間際のビデオを撮った。各参加者に焦点を当てた撮影が一人当たり30秒、グループ全体の撮影が会合の始めに10分、中間と終了間際に各20分になるようにした。飲み会は蒸留酒だけを出す会、ビールだけの集まり、ジュースとソフトドリンクだけの集まりを設けた。会合の最初と中間と終了間際にアルコール検知器で血中アルコール濃度を測定した。

各参加者は30秒の映像期間ごとに、11の攻撃行動のコードと6の向社会的行動のコードにあたる行動をしたかどうか符号付けされた。

段階Ⅱ：テーマとコードの開発（ステップ1と2）

攻撃行動のためのコードは、Bales (1970) の相互行為過程分析コードに基づく様々な行動心理学研究、McClelland, Davis, Kalin, & Wanner (1972) の研究、Boyatzis 自身のこれまでのアルコール中毒患者の

リハビリの研究などに基づいて構築された。つまり、先行研究駆動型アプローチを採用した。攻撃行動のコードのうち5を示すと次のようになる。

① 冗談をいう：誰かにそこにいるグループやそこにいないグループについてちやかすことを言う（特に民族的なからかい）。誰かを貶したり、馬鹿にする話や逸話を話す。

② 虚仮にする：誰かに恥をかかすためや、誰かの馬鹿さかげんを示すためにその人のまねをしたり、風刺したりする。

③ 難癖を付ける：仕事ぶりや教えてくれたことが適切でないかのように言ったり、権限を遂行する能力を疑問視するようなことを言う。嘲る。

④ 支配する：他人の行動をコントロールし、指図し、監督しようとする。強いる。命令する。

⑤ 虐める：悩ます、なじる、邪魔する、嘲笑する、あるいは敵に回すようなことをする。

向社会的行動のためのコードは、理論から開発した。すなわち、演繹的な理論駆動型アプローチを採用した。向社会的コードのうち3つを示すと次のようになる。

① 挨拶する：手を振る、近寄る、「やあ」と言う、自己紹介する、握手する。

② 連帯を示す：「グループ」の他のメンバーと一緒に仲良くやりたい旨を告げる。他人の行動や発言を支持する。グループのメンバーに加わることを公言する。集団のユーモアと一緒に笑う。

③ 依存する：他人の援助を受ける。感謝する。何かしてくれた人を尊敬する。

段階Ⅲ：テーマとコードの開発（ステップ3）

コーディングは訓練を受けた二人の男性評定者によって行われた。評定者間の信頼性は攻撃コードで $r = 0.949$ 、向社会的コードで $r = 0.925$ であったので、信頼性は検証されたとと言える。

段階Ⅳ：コードの妥当性の確認と使用

コード化された攻撃行動とアルコール摂取量との間に、また様々なパーソナリティ特性テストの得点と攻撃行動との間に高い有意な統計的関連が見られた。向社会的行動とアルコール摂取量やパーソナリティ特性の得点との関連は弱かった。

Ⅳ データ駆動型コードの開発

最後にデータ駆動型アプローチを見ていこう。まず、V.Braun & V.Clarke (2006)のテーマ分析の手続きを示し、次いで、Boyatzis (1998)の手続きを見てみよう。

(1) V.Braun & V.Clarkeの手続き

V.Braun & V.Clarke (2006)は没頭／結晶化整理法のテーマ分析のプロセスとして、次の6つのステップを挙げている。

ステップ①：データに慣れ親しむ

繰り返しデータを読みデータに精通する。そのための最善の方法は、口述された語りを逐語的に書きすることである。その作業のなかで、コード化のアイデアを思い浮かべながらメモなりノートを取る。

ステップ②：最初のコードを産み出す

データ・アイテム（一人の話者の一回のインタビューでの語り全体であるとか、あるフォーカス・グループの会合での討議の全体などひとまとまりのデータを Braun らはデータ・アイテムと呼ぶ）の中の意味の纏まりがある単位、すなわち意味単位（Braun らはデータ抜粋と呼ぶ）を区切る。ついで、データ抜粋の中の興味深い側面を探り出しながら、それをコード化する。そして、類似した側面がデータ集合（特定の分析のために集められたデータ・アイテムの全体を Braun らはデータ集合と呼ぶ）の中の様々なデータ抜粋で繰り返し現れれば、それがテーマである。すべてのデータについて最初のコード化を終え校合し、コード

の長大なリストを作成する。

この段階では次のような点に注意しなければならないとされる。

i) 可能な限り多くのデータ抜粋をコード化しておき、テーマ候補をなるべく多くしておく。後で不要なものは削ればよい。後になって重要なテーマとなりうる素材を予めカットしないようにすべきである。

ii) データ抜粋は包括的にコード化の素材として残しておく必要がある、重要と思われる語句の前後の文章をすべて残しておくべきである。そうしないと、後でコードの文脈が分からなくなる。

iii) 一つのデータ抜粋は、複数のテーマの候補として別々のコードを与えられることがありうる。いいかえると、データ抜粋は、① コード化されないもの、② 一つだけコードを与えられるもの、③ 複数のコードを与えられるもの、に分かれる。①はテーマとは無関係の部分、②は一つのテーマにかかわる部分、③は複数のテーマにかかわる部分である。

iv) データ集合内に矛盾がないかのようにコード化を歪めてはならない。主なテーマとテーマの関係から浮かび上がってくる主要なストーリーから逸れた話も保持しておいて、コード化の際もそれらを無視しないようにすべきである。

ステップ③：諸テーマの探索

様々なコードをテーマ候補ごとに分類し、同定された諸テーマ内で関連するコードを与えられた諸データ抜粋を校合する。それによって、様々なコードをどのように括っていけば上位のテーマが現れるかを考える。表やマインド・マップを用いたり、一枚一枚の紙に各コード名とその要約を書き出し、それらをテーマごとに山積みにして振り分ける。それによって、諸コードをテーマに、諸テーマを上位テーマへとクラスタリングしていく。

そして、主要な諸テーマの候補、それぞれの主要テーマのサブテーマとなりうる候補、さらにそれらに含まれない「雑多な」コードを区別して記し、主要なテーマとそれらのサブテーマについては関係するデータ抜粋を書き出してこの作業段階は終了する。

ステップ④：諸テーマの再検討

各テーマ候補に含まれるデータ抜粋を読み直し、それらが結束性、一貫性をもっているか否かを再検討し、それらを純化していく。純化とはテーマの作り直し、テーマに合わない抜粋の移動または分析からの除去、を行う作業である。純化のプロセスの中で、① テーマ候補から関連性がないものとして除去されるもの、② それまで別々のテーマとされていたもので、一つのテーマに纏められるもの、③ それまで一つのテーマと考えられていたものが、別々のテーマに分解されるもの、などが出てくる。

テーマを純化していく基準は、内的等質性と外的異質性である (Patton, 1990)。つまり、テーマ内の諸データは類似性を持ち、テーマ間では明瞭で識別可能な差異が存在しなければならない。

まず、データ・アイテム内で、テーマの再検討と純化を行い、テーマ図 (thematic map) の候補となるものを作る。次に、すべてのデータ集合に対して、それらのテーマ図が適合しているか確認しながら、再検討と純化を繰り返す。データ集合全体を読み返す中で、新たなテーマとして加えるべきものが残されていないか再検討していく。もしあれば、それらをコード化して、テーマとして加える。

ステップ⑤：テーマの定義づけと命名

各テーマの校合されたデータ抜粋に戻って、それらを物語を伴い、結束した、そして内的に一貫性をもつ解説へと編集し、各テーマのストーリーを確定する。

次に、各ストーリーをデータ全体について語るより大きなストーリーに適合させる。そのために重複し合うテーマを合併したり、一つのテーマの内容が複雑すぎればいくつかに分離する。こうして、包括的テーマ (overarching themes) とそれに下属するいくつかのサブテーマからなるテーマのヒエラルキー構造を確定する。

以上の純化作業に基づいて、各テーマが何であり、また何でないかを明確に定義する。テーマの名称としては、簡潔で力強く、読者にそのテーマが何のテーマかすぐに分らせることが出来るものを選ぶ。

ステップ⑥：報告書の作成

報告書の書き上げは、読者に分析の価値や妥当性を確信させるように、データについてのストーリーを語ることである。つまり、簡潔で、結束した、論理的で、繰り返しのない、興味深い筋をもつ解説を与える必要がある。

そのためには、まず、テーマを生き生きと示す抜粋例、問題の本質を捉えた抜粋例を与えなければならない。

しかしデータを編集するだけではだめで、そのデータが語っていると報告者が考えるストーリーを例証する分析的物語(analytic narrative)を作成し、その中に適切な抜粋例を配列していく必要がある。

さらに、分析的物語は、データの記述や編集を超えて、研究上の問いと関連した議論をしなければならないという。

(2) Boyatzis の手続き

Boyatzis (1998)によれば、この没頭／結晶化整理法のテーマ分析のプロセスは図3のようなになる。このように、帰納的なデータ駆動型コードの開発には、ステップ①：生の情報の縮減、ステップ②：サブサンプル内でのテーマの識別、ステップ③：サブサンプル同士でのテーマの比較、ステップ④：コードの作成、ステップ⑤：信頼性の検証、の5つのステップがあるとされる。

段階Ⅰ：サンプリングと設計。いま夫婦関係の評価の男女差を研究しているとしよう。すると、基準変量(従属変数)は夫婦関係評価となり、独立変数は性になりその変量は男と女の2である。そこで、サンプルはA(男)、B(女)の二つ必要になる。サンプル数を今20ずつとしよう。そして、コードの開発に用いるサブサンプル数をそれぞれ5としてみよう。

段階Ⅱ：テーマとコードの開発。それぞれのサブサンプルを用いてすべての可能なテーマとコードを生成させる。次に男と女のサブサンプル同士を識別しうるテーマとコードを開発しなければならない。

段階Ⅲ：コードの妥当性の検証と使用。男と女のサンプル全体で男女差があるか否か検証するために、サブサンプルで生成され、男女差有りとされたテーマ・コードをサンプル全体に適用する。

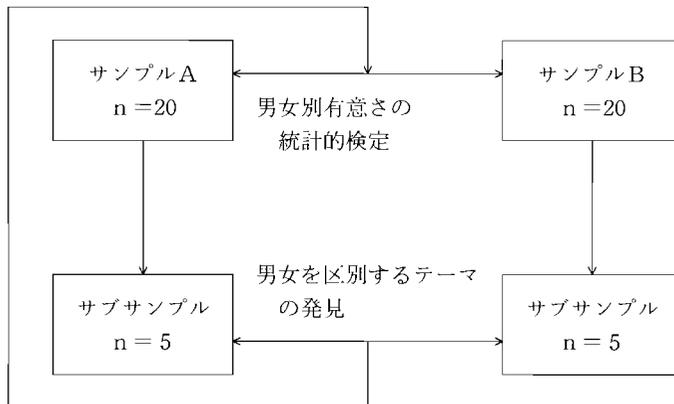


図3. 帰納的アプローチにおけるテーマ分析のプロセス

ステップ①：生の情報の縮減

図4に示すように、それぞれの分析単位（各サンプル）の生の素材（テキスト、音声、映像など）を読み、聴き、見て、データや情報の各部分（意味単位）を言い換えたり要約する。このステップは更に、①各プロトコル（トランスクリプトなど）を読み、聴き、見て、意味単位を識別するサブステップ、と②各意味単位を概要や大意に言い換えるサブステップに分かれる。

- ① 各プロトコルをひたすら読み意味単位を識別する。
- ② 各意味単位の概要を書く。②の代替案としては、元のトランスクリプトに直に下線を引いたり、サインペンで目立たせるなどしてから、後でまとめて概要を書き出すやり方もある。

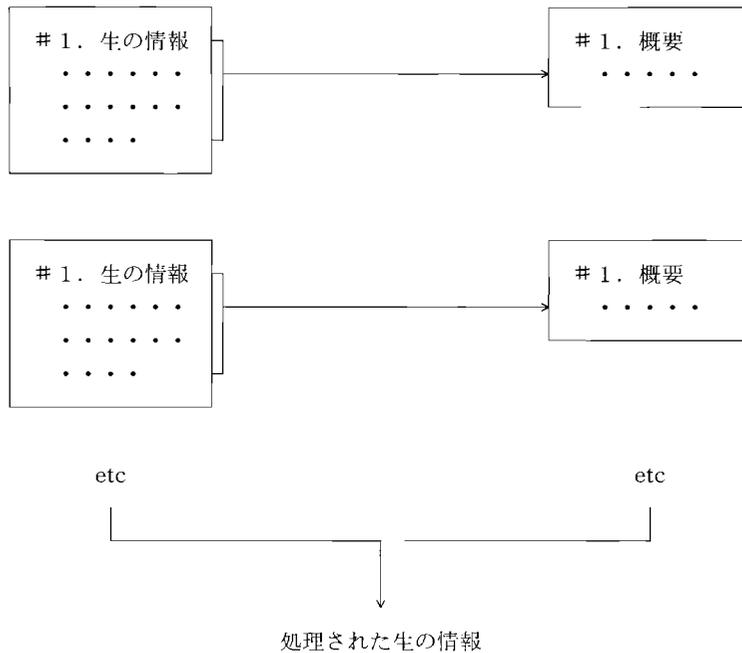


図 4. 段階 II のステップ 1：生の情報の縮減

ステップ②：サンプル内のテーマの識別

図5に示すように、サブサンプルの要約同士を比較してサブサンプルごとにその内部の意味単位間の類似性を見極める。とくに、一つのサブサンプルから得られたすべての要約を比較し、サブサンプル内の類似性やパターンを探し、このプロセスを他のサブサンプルでも繰り返す。

ステップ③：サブサンプル間のテーマの比較

図6に示したように、「各サブサンプル内で類似したもの」として識別されたテーマや見出し（項目）を比較する。そして識別されたパターンを通して両グループを比較する。

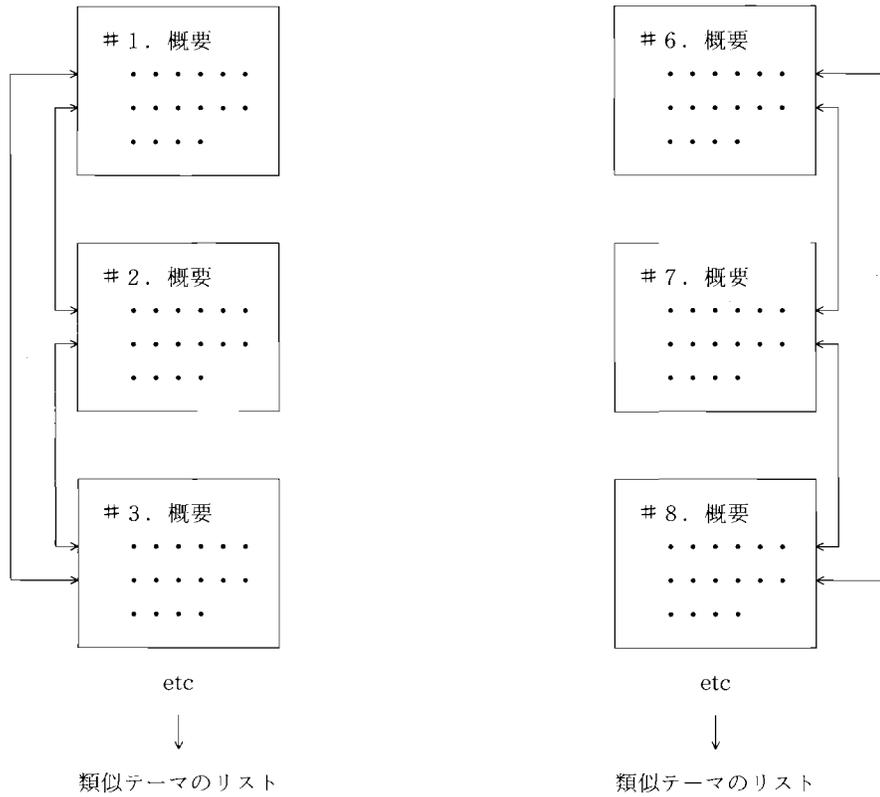


図 5. 段階IIステップ②：サブサンプル内の諸テーマの識別



図 6. 段階IIステップ③：サブサンプル間のテーマの比較

ステップ④：コードの作成

図7に示すように、二つのグループ（サブサンプル）を区別する陳述の集合を書きだし、必要に応じて書き直し、構成する。この予備的な諸テーマの集合がコードになる。ここで再び生のデータに戻って、プロトコルを再読し、他にも予備テーマが存在しないか確認し、必要に応じて追加する。

こうして改訂されたテーマは、①サブサンプル間の差異を最大化し（グループAのすべてのサンプルがそのテーマを示し、グループBのサンプルがそのテーマを示さない場合が最大）、②生の情報に適用が容易で、③除外基準を最小にする様に構成されるべきである。基準に準拠したサブサンプルの分析単位を実質的に区別する（この例では男か女で夫婦関係の評価項目がはっきり異なる）テーマのみがコードに含まれる。

-
1. サブサンプル間の差異を最大にするように各テーマを書き直す。
 2. 生の情報に戻って確認する。
 3. サブサンプル間の差異を最大にするように、各テーマを特性コードの形式に書き直す。それには次の項目が含まれる。
 - a) 名称
 - b) 記述または定義
 - c) 標識（合図のための印）
 - d) テキスト内の実例
 - e) 特殊な条件あるいは除外する場合の基準
-

図7. 段階IIステップ④：コード作成

ステップ⑤：コードの信頼性の検証

図8に示すように、コードやテーマをサンプル内の別のサブサンプルに適用してみる。そして、別の評定者に独立して、同じ素材にそのコードやテーマを適用してもらう。そして、判定者間の一著度（コードの信頼性）を算定する。望ましいレベルの信頼性が得られなかった場合には、以後の考察や分析からそのテーマを除外するか、書き直してコードを再構成してステップ4を繰り返す。判定者間の一致度が高くコードの信頼性が検証されれば、それらの諸テーマの集合がコードになる。

以上の段階IIのプロセスを経て構成されたコードは段階IIIで残りのサンプルに適用し、コード化された生の情報の基準変量と独立変数との間の統計的有意差を確認し、コードの妥当性を検証する。

-
1. コードを別のサブサンプルに適用する。
 2. 同じことを別の評定者に実行してもらう。
 3. 評定者間の信頼性係数を算定する。
-

図8. ステップ⑤：コードの信頼性の検証

V テーマとサブテーマを発見する方法

ライオンら (G.W.Ryan, & H.R.Bernard, 2003) は、テーマ発見の実用的方法を提示しているので、これについてみてみよう。

ライオンらによると、**テキスト分析**は次の四つの段階から成っている。①テーマとサブテーマを発見する、②テーマを選びすぐって処理しうるだけの数に絞る（研究上の間から見て重要なテーマに絞る）、③テーマのヒエラルキーあるいはコードブックを作る（template 分析）、④諸テーマを結合して理論的モデルを作る。

これをグラウンデッド・セオリーの初段階と対比すれば、①はオープンコーディング、②は軸足コーディング、③は選択的コーディング、そして④は理論的センシティビティによる理論化の各段階に対応すると考える。

テキストの中に現れた、単語、フレーズ、そして「纏まりの結束性と一貫性をもったパラグラフに至る、様々な規模の分析単位を表現と呼ぶ。そして諸表現を結びつける抽象的概念をテーマと呼ぶ。テキスト、イメージ、音楽、オブジェなどの中に見いだされる諸表現を結びつけるテーマは、「この表現は何の一例なのか」という問の答えである。

表現は、グラウンデッド・セオリーでは、incidents, segments, concepts などと呼ばれ、テーマ分析では、thematic units, data-bits, chunks などと呼ばれる。

またテーマ分析のテーマに対応する用語は、グラウンデッド・セオリーでは、categories, code, labels などと呼ばれる。

テーマはデータから帰納的に現れる場合もあれば、先験的な理論的理解から演繹的に現れる場合もある。先験的アプローチを採る場合には、先行研究の専門化の定義、フィールドでの人々の常識的構成概念などに精通し（理論的感受性）、インタビューでの話題 (topics) に何を含め、その話題についてどのように質問するかを旨く決められなければならない。また、多くの質的研究の場合には帰納的アプローチを採るが、この場合には浮上してくるテーマは予見できない。こうしたテーマの発見はグラウンデッド・セオリーではオープンコーディング、イニシャルコーディング、実質的コーディングなどと呼ばれ、内容分析では質的分析、潜在的コーディングと呼ばれている。

テーマ発見の方法にはテキストを吟味して主題を発見する技法とテキストを加味して主題を発見する方法がある。

(1) テキストを吟味する方法

① テキストの中に「**反復的に出現する話題**」(R.Bogdan & S.K.Taylor, 1975) や「**変わらずに何度も現れるもの**」(E.G.Guba, 1978) がテーマである。

② インビボコードで表現された「**固有のカテゴリー**」(indigenous categories) や類型がテーマである。部外者にとって馴染みがなく聞こえたり、よく知らない使われ方をする局地的な言葉遣いは、テーマを表していることが多い。M.Q.Patton (1990) は「分析家が構成した類型」(analyst-constructed typologies) と対比して人々のヴァナキュラー (vernacular) な類型を固有のカテゴリーと呼んだ。グラウンデッド・セオリーの方法ではこれをインビボコード (in vivo code) と呼んでいる。エスノグラファーは分類図式や文化領域と呼び、民俗学ではフォーク・タームと呼んでいる。

③ メタファー（隠喩）とアナロジー（類比）を分類することで現れる**メタメタファー** (meta metaphor) がテーマである。人々は思考や行動や体験をメタファーやアナロジーで表現する (G.Lakoff & M.Johnson, 1980) ので、修辞の中のメタファーを探して、これらのメタファーを生み出しているシエマ (schema) や基底的主题を推測すればいい (R.D' Andrade, 1995; C.Strauss & N.Quinn, 1997)。

④ テキストの段落や会話の中断などで転換が示される**データの塊の話題**がテーマである (M.Ager, 1983; D.Silverma, 1993)。

⑤ 類似した**諸表現の類似した部分**がテーマである。「**絶えざる比較法**」(B.G.Glaser & A.Strauss, 1967) では同一の話者のデータ内や異なる話者達のデータ間でオープン・コーディングによって得られた諸概念のプロパティやディメンションを比較してカテゴリーを生成していく。このようなテキスト内の諸表現間の類似や差異を探し、他と異なるとして纏められた抽象的な類似性がテーマである。

⑥ 因果関係、前後関係などを示す言語学的な**連結詞で結びつけられている語群**がテーマである (P.H.Lindsay & D.A.Norman, 1972)。

⑦ **欠けているデータ**、話されなかったデータに重要なテーマが隠されている。特定の価値観や権力関係の存在が特定の話題を避けさせることがあるので、対象者が意図的に又は意図せずに避ける話題に注意せよ (R.Bogdan & S.K.Taylor, 1975)。また、話者達が知っていて当然と思っていることは省く傾向があるので、固有のカテゴリーが語られない場合もある (J.P.Spradley, 1979)。

⑧ テキストの中で**理論やパラダイムに関連する話題**がテーマである。グラウンデッド・セオリーでは B.G.Glaser (1978, 1998) の理論的コードや A.Strauss & J.Corbin (1998) のパラダイムのように質的データから理論を浮上させる理論的概念の雛型を準備している。こうした理論的概念に関連した話題をコード化していくことで中心的テーマが発見される。

(2) テキストの加工技法

⑨ **切り取りと選り分け**によってテーマが発見される。テキストを精読した後で、重要と思われる表現を切り取り、こうして得られた引用文(表現)を選り分けして一緒に括れるものの山を作る(pile-sorting, Y.S.Lincoln E.G.Guba, 1985; S.C.Weller & A.K.Romney, 1988)。

山を分ける方法としては引用文間の差異を最大化するような細分法(splitter)と差異を最小化する併合法(lumper)がある。木下康仁(2003)の分析ワークシートの方法はメモ・ライティングと切り取り・選り分け法を同時に行うための作業である。

⑩ **単語一覧表と文脈内のキーワード法**によって得られた例文を類似した意味を持つものを選り分け、得られた山がテーマである(G.W.Ryan & T.Weisner, 1996)。

⑪ **単語共起法**(word co-occurrence)(単語共起行列を因子分析、クラスター分析などにかけて得られた共通因子やクラスターがテーマである(H.Y.Jang & G.Barnett, 1994)。

⑫ **メタコーディング**これまでに発見されている諸テーマを単位×テーマ行列に記録しこの行列を因子分析などにかけて得られた共通因子がメタテーマである(H.Y.Jang & G.Barnett, 1994)。

ライアンらは、テキストデータの性格とテーマ発見技法との適合性について図9に示すように纏めている。

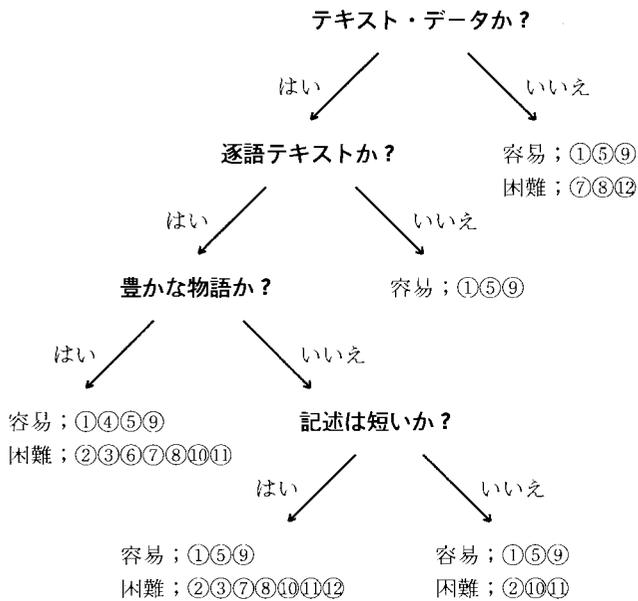


図9 テーマ発見の諸技法間の選択 (G.W.Ryan, & H.R.Bernard, 2003)

VI 解釈学的現象学におけるテーマ分析

(1) 解釈学的現象学におけるテーマ

解釈学的現象学的研究は、van Mannen (1990) が言うように、人間の生活世界、すなわち日常の諸状況や諸関係の中で経験される「生きられた世界」の構造を究明する。この生活世界は、多様な経験と、それらの意味を解釈するのに用いる多様な意味によって分節化している。これらの諸経験流の焦点となる出来事や行為およびそれらを解釈するのに用いられた意味がテーマである。テーマによって経験流は要約され、単純化される。テーマは、生活世界内やそれを記述したテキスト内の特定の事物を指す対象として必要とすることはない。テーマとは生活世界やそれを記述したテキストに見られる諸現象としての経験流から諸々の意味を取り出す自動詞的活動の所産である。

現存在としての私は世界内の諸現象を理解しようとし、それらに意味を与える解釈活動として、経験流の特定の出来事や行為に焦点を当てて、その経験流全体を捉える。同様に、現存在としての私は、別の現存在としての他者の経験を対話の中で聞き取り、あるいはそれを記述したテキストを読み、その経験流の特定の出来事や行為に焦点を当てて、その他者の経験流全体を捉える。このような解釈のための焦点化と、意味づけこそがテーマに他ならない。

テーマは私の解釈の産物としても、また他者やその語りのテキストと私との対話の中での共同制作的解釈の産物としても、さらにまた他者やテキストが私に与える解釈の産物としても、現れる。つまり、テーマは私の解釈、他者の解釈、そして共同制作的解釈のいずれかとして産み出される。

「現象学的テーマとは、ものであったり、一般化であるのではなく、比喩的に言うと、我々の諸経験という蜘蛛の巣の結節点のようなものだ。・・・テーマは星々のようなものであり、それらが我々の生き抜く意味の宇宙を作り上げている。これらのテーマに照らされて、我々はこの宇宙を航行し、探索する。」(van Mannen, 1990: 90)

(2) 解釈学的現象学におけるテーマ分析

解釈学的現象学に基礎を置く質的研究では、テーマを様々なテキストの中に繰り返し現れる共通の経験のこととして捉え、テーマ分析とは諸経験の意味と、それら間の階層構造なりネットワーク構造、すなわち諸経験の意味連関を明らかにすることを目的とするテキスト分析法であると考えられる。解釈学的現象学は、人々の「生きられた意味」や「経験の中で見いだされた意味」を明らかにする。だから、解釈学的現象学のテーマ分析は、人々の語りのテキストから、「生きられた意味」がどのような構造(連関)をもって現れるか、すなわち、様々な生活場面での、主な生きられた意味とそれに関連した様々な生きられた諸意味がどのように関連しあっているのかを明らかにすることを目的にしている。

科学的現象学では、人々の間で不変の「生きられた意味」、すなわちその人々の置かれた共通の生活状況での本質的な「生きられた意味」を、内観法と比較法を用いて明らかにする。

また、グラウンデッド・セオリー・アプローチでは、人々の間の様々な生きる意味から、中心的なカテゴリーとそれに関連するサブ・カテゴリーを浮上させ、それらの間にどのような関係があるのかを、帰納的分析によって彫琢していく。

それらに対して、解釈学的現象学では、私(我々)の生きた意味と人々によって生きられた意味との遭遇の中でそれらと比較融合し、人(人々)によって生きられた意味を私(我々)の意味で読み取っていく。つまり、人々の意味を、私自身の生活世界の中にある意味、すなわち言葉に表さずに了解した用いる意味に置き換える(解釈する)。この作業は、人々の「世界の分節化の体系」である彼らの「言語」で表現された意味連関を、私の「世界の分節化の体系」である私の「言語」で表現された意味連関に読み替えていく作業ともいえる。しかし、それぞれ異なる地平に立つ私と他者とは対話の過程で相互に相手の地平の意味構造を変容させていく。つまり、解釈は単なる読み替えではなく、読み替えに用いる私と他者のそれぞれの世界の分節化のやり方、言いかえれば観念体系そのものを変容していく。地平の融合はこのようにして進められる。

このプロセスの中で、テーマ分析はハイデガーの形式的告示に当たり、人々の経験の世界に繰り返し現れる共通の意味のどれに注目すると、彼らの生活の意味連関の全体が私の言語体系で理解できるかを明らかにする作業だといえる。その注目された意味こそ中心的テーマ（GTでいう中心のカテゴリー）に他ならない。テーマ分析とは端的に言って、中心的テーマを同定する作業といえる。それに対して、「編集された典型的な例証的事例」（N.King, 1998）や「分析的物語」（V.Braun & V.Clark, 2006）は「生きられた経験の構造の十分な記述」（van Mannen, 1990:92）として、解釈学的現象学が最終的に書き上げる報告の表現形式に他ならない。ここに、「分析的物語」とは、様々な人々が彼らの人生の中で生きた諸テーマごとのモニター・ジュ法による群像的なストーリー形成であり、「典型的な例証的事例」とは諸テーマを理念的に生きた人の事例と考えられる一人の人間の生の全体をテーマごとに編集した物語である。

(3) テーマ分析に適したデータ収集法としての対話型インタビュー

会話形式のインタビューとそこから得られるテキスト・データが解釈学的現象学的分析に適している。その理由は次のようなことである。対話者たちが、関心を共有した場合、つまり、何らかの現象や、何らかの考え方についての話題を共有した場合には、相互の話しかけは単なる発話ではなくなり、問いかけ―応答という対話構造（Gadamer, 1975）をもつ会話になる。この話題こそ、話者たちが自分たちの経験流を焦点化したテーマに他ならない。だから、テーマを明らかにするためには、対話形式のインタビューから得られたテキストデータが最も適したデータといえるのだ。ガダマーが言うように、テーマが絞られた対話における問いかけは「地平のある問」となる（Gadamer, 1975: 訳書562頁）。テーマをもったとき初めて、対話は焦点をもち、対話者同士の地平の融合が始まるのだ。

こうした対話形式のインタビューで語られたテーマは、対話者たちが生活経験に共同制作的に与えられた意味を指すものである。そして対話の場では、話者たる人々がそれらの現象や経験に対してイーミックな意味をまず与えるだろう。しかし、聞き手は自分の地平にたつて、言いかえればおのれの視野から捉えた彼らの諸経験についての自分の解釈に照らして、話者の与えた意味づけに、同意や不同意、不可思議さや理解不能さなどを示す顔面表情、つぶやきや相づちなどの様々な応答を与え、また話の展開を左右する受け答えや質問をするだろう。こうして、話者たる人々が認知していた元々の現象の彼らによる構成の仕方やそれらに与えていた諸々の意味は、対話の中で聞き手が導入する共同制作的視野によって解釈し直され、組み立て直されていく。つまり、話者の生活世界における諸々の経験は、対話の場で、共同制作的に再生される。このように、テーマをもった焦点の定まった会話形式のインタビューこそが、話者と聞き手のそれぞれの地平を融合させる場であるといえる。

このように、インタビューは解釈学的会話として行われなければならない。ある話者とのテーマを絞った会話、すなわち対話を進めるのだ。そして、その話者の経験した出来事、行った行為の意味を意識化して言語に表してもらい、聞き手が同じような意味や感情をその経験に見いだせれば、そのまま話を続けてもらう。しかし、そうでない場合や、分からない場合には、それはどういうことなのか、さらなる説明を求めたり、自分の知っていること、自分の感じることを口にして、話者のさらなる発言を引き出す。こうして、聞き手が最初分からなかったり、初めて聞いて馴染めないような意味や感情や意志について、それらの意味連関、感情複合、意思全体を十分納得できるまで聞き取っていく。これは日常会話の中で行われる十分な相互理解の進め方と何らかわらない。

なるべく聞き手が話者が本来抱いていた意味をそのまま取り出そうとして、相づちや批判的まなざしなどを与えないようにして、話者の反応を誘導しない様に勧めるインタビューの手引き書は、経験の意味づけ（テーマ）を最初からそこにあつたものとして扱ひ、実証主義的なインタビューの手法といえる。

解釈学的現象学的なインタビューの方法はデータ収集の場でも地平の融合を進めようとする。だから、聞き手は積極的に自ら既に抱いている先入観や前提を話者に見える形で示し、同意や不同意を求めながら共同制作的に経験の意味づけを進めていかなければならない。

さて、こうしたインタビューを繰り返す中で、それまでに行つたインタビューで、明らかになった、諸経験の諸々の意味をテーマにして、追跡的な聞き取りを繰り返していく。そして、各テーマについて、新しい話者がそれまでのインタビューで共同制作的に表現された諸々の意味と同じように経験を意味づけているの

かを確かめていく。これが解釈学的反省である。すなわち、前の人の言ったある経験についての意味づけをテーマとして、次の話者との対話で、それらのテーマが同じように表現されるのか、それとも別の意味が与えられるのかを確かめる。それをさらに次の人々とも繰り返す中で、人々に共通して不変的に現れる意味と、個々の人が固有に与える特異な意味とに弁別し、前者を取り出すことで、それらの人々（意味の共同体）の経験の本質的な意味づけが明らかにされていく。

(4) テキストを対象としたテーマ分析の三つのアプローチとその順序

van Mannen (1990) は、テキスト内のある現象のテーマを分離し、明確にするために、次の三つのアプローチがあるという。

- ① 全体的、あるいは簡潔で要を得たアプローチ
- ② 選択的、あるいはある部分を強調するアプローチ
- ③ 詳細な、あるいは一行ごとのアプローチ

全体を読み取るアプローチでは、テキスト全体に注意を向け、全体としてのテキストの根本的意味を捉えている簡潔で要を得たフレーズはどれかを問い、それを明確にする。これは、J.Attridge-Stirling (2001) の言うテーマのネットワークにおける包括的テーマの析出や A.L.Strauss & J.Corbin (1990) の選択的コーディングにおける中心のカテゴリーの帰納的分析による確定のような部分的諸テーマから全体的テーマを積み上げていくやり方とは全く異なる。

ここでは、まず、全体的テーマが直観的に捉えられるのである。ところで、あるテキストの根本的あるいは全体的な意味が何であるかについての判断は主観的であり、読者が違えば識別される根本的意味も異ってくる。だから、ある解釈が別の解釈よりも真実に近いと言うこともない。しかし、意味は個々の個人ごとで特異であると言うことはない。ある現象に対して個人の抱く意味や感情はローカル言語を共有し、同じ世界の分節化体系を共有する、**意味の共同体**の中で生まれ、彼らの間の相互行為の中で常に制定され直されるために、認識の共同体あるいは意味の共同体ごとに特異であるといえる。つまり、テキストを産み出した話者もそのテキストを読み取る聞き手もそれぞれが、特定の認識の共同体、意味の共同体の中に住んでいる。テキストの読みの中で、あるいはそれ以前の対話としてのインタビューの中で、この話者と聞き手、あるいは書き手と読者のそれぞれの共同体の地平の融合が始まるのだ。

選択的に読み取るアプローチでは、テキストを何度も読み返して、語られ・記述された現象や経験を明確に浮かび上がらせたり、本質的と思われる陳述やフレーズに特に注目する。これは、G.W.Ryan & H.R. Bernard (2003) のテーマとサブテーマを発見する方法の中の**内生的カテゴリー**（インビボ・コード）や A.L.Strauss & J.Corbin (1990) の**コーディング・パラダイム**や B.G.Glaser (1998) の**理論的コード**を用いてテーマを選択する方法に通ずる所がある。K.Charmaz (2006) の焦点づけられたコーディングも同趣旨であるといえる。ここでは、全体的テーマに関連性やペルテナンスがある現象や経験のみをピックアップしていく。

詳細な一行ごとのアプローチは A.L.Strauss & J.Corbin (1990) のマイクロ分析と同様に、すべての文章あるいは文章群を点検し、語られた現象や経験の何を明らかにしているのかを見定める。

ところで、解釈学的現象学の立場では、解釈の循環はまず全体から部分へと向かい、ついで部分から全体へと戻るとされる (de Sales Turner, 2003:19)。つまり、解釈学的現象学のテーマ分析では、テキスト全体の根本的テーマを直観的にまず捉えそのテーマに関連した生活経験の意味を拾い出し、ついで語りあるいはテキストのすべての細部がその全体的テーマとどのような機能的関係があるのかを明らかにしていく。その後、細部の分析で明らかになったサブ・テーマから、全体の包括的テーマを再形成する。

それに対して、GT では一行ごとのマイクロ分析とオープン・コーディングで話者の言葉（インビボ・コード）を研究者の概念に置き換え、軸足コーディングで概念をいくつかのカテゴリーへと纏め、選択的コーディングでカテゴリーを中心にカテゴリーと副次的カテゴリーに分け、それらの間の関係を確定していく。つまり、GT では部分から全体へと帰納的な分析が進められる。

V.Braun & V.Clark (2006) は解釈的テーマ分析をイーミックな理解とエティックな理解の融合という

視点からこの問題を捉えている。解釈的テーマ分析では、まず、①人々が語った話の表層に現れた意味のパターン、すなわちテーマやサブテーマとそれらの間のヒエラルキー構造としてのテーマ図を明らかにし、テーマ図とデータからの抜粋例を呈示する。次に、②テーマの意味や含意、テーマを生み出す条件、テーマについての特定の語り方が生まれる理由、諸テーマから構成される全体的なストーリーなどを明らかにする必要があるといっている。①はその文化のメンバーの一員としての、すなわち内側からの理解を示している。これはヴァンキュラーな視点からの意味理解といえる。それに対して、②はその文化のコメンテーターとしての、すなわち外側からの解釈を示している。これは解釈者が研究者であれば学術的視点からの意味理解といえる。

そして、V. Braun & V. Clarke はその一例として、Frith & Gleeson (2004) を取り上げている。Frith & Gleeson は男性たちの衣服の着用に関する語りから、①の内側からの理解としては、衣服選択における実用性の重視、外見への関心の欠如、身体的特徴を隠蔽したり顕示するための衣服使用、文化的理想に合致するための衣服使用、という四つのテーマがあることを明らかにした。また、②の外側からの理解としては、「男たちが『男らしさ』についての文化的理想に合致するように外見を操作すべく、慎重にかつ戦略的に衣服を用いている」という解釈を与えている。

このように、解釈的テーマ分析は、話者の生活世界における体験流をミメシスとして再現するだけでなく、体験流に現れたテーマについて聞き手が自らのディエゲシスを添えていく作業だといえる。

(5) 地平を融合させる対話としてのテーマ分析法とその限界

ハイデガーの「世界」やガダマーの「地平」は言語共同体の中で歴史的に形成される伝統（「言語共同体にとっての現実」）を基盤にしているといえる。そして、両者とも、西欧の諸民族国家をイメージして伝統を考えていると思われる。ガダマーは、意識が言語に規定されると考えていたので、言語共同体の中では、テキストと読者の間の時間的隔たりが対話で埋めらうと思ったのだろう。

しかし、同じ言語共同体に属していても、体験流を取り巻く諸状況からなる生の文脈はそれぞれの人で異なる。ましてや、まったく異なる言語共同体や時代に生きた人々の間で、完全な理解やその結果もたらされる対話の後の沈黙といったものはほとんど達成しがたいものと言わざるを得ない。ガダマーが9月11日に「対話の不能」を実感した（石川，2005）のは、そのことを如実に表しているといえよう。私は、対話の不能を前提にしない解釈はありえないと考えている。であるからこそ、よりよい理解や解釈の循環ということが意味を持つのではないだろうか。解釈は達することのない「真理」を目指す過程でしかない。地平は同じ言語共同体に属する同時代人にとっても認識の共同体や実践の共同体の数だけ存在するといわなければならない。さらに、同じ認識の共同体に属していても、個人に特異な体験流に由来する、意識、感情、意志はその意味連関を外的に把握できたとしても、共感的に理解することはできないかもしれない。

こうした「対話の不能」を前提としたテキストとの対話の具体的方法が「テーマ分析」法だと言える。ここで、話者と聞き手の間で相手の語りの内容を自己の地平に取り込むことはピアジェのいう同化に等しく、相手の語りにも用いられた視野構造（世界の分節化の仕方）にそって、自分の視野構造を変えることはピアジェのいう調節に等しい。この対話における同化と調節によって、インタビューの中で「共同構築が可能な現実」こそ、融合されうる地平に他ならない。しかし、対話的インタビューの過程でも、そのデータをテキスト化した後に行うテーマ分析の過程でも、聞き手には理解できない話者の生の部分が残されており、また逆に話者にとっても聞き手の質問の意味や意図、さらにはその背景にあるであろう聞き手の視野構造のなかに理解できないものが残される。理解しえない部分は生きた時代の差によるのかもしれないし、生きた状況の違いによるのかもしれない。あるいはもっと根本的に、（異なる言語共同体の）文化伝統の違いかもしれない。聞き手も話者も、それぞれ、今まで生きてきた別々のシンボリックな相互行為の流れの中で独自の意味を生み出していて、その溝が対話では埋められないことがあるであろう。この理解不能の領域を狭めていく努力がよりよい理解を生むのであるが、解釈の循環を繰り返しても、シュライエルマッハーによって人間が一般的に共有しているとされた「客観的精神」のようなものを前提にしなければ、その領域について完全な理解に達するとは言えないであろう。

さらにもう一つ「対話や解釈の方法では捉えられない領域」が残されている。それは、話者と聞き手の双

方が意識していない、生や世界の規則性や構造である。この領域は、対話の外に立って、部外者の目で話者と聞き手の双方をそれぞれ別個にとらえなければ把握できない領域であり、解釈学的方法の埒外の領域と言ってよい。その領域は意味理解の領域ではない。それは法則性と構造を捉える領域である。解釈学の陥りやすい最大の誤りは、現象をとらえるのに意味理解以外の方法があり得ないと考えることだ。実証主義や構造主義の説明の方法も解釈と並んで現象の重要な捉え方と言わなければならない。

ここで私が「対話によって共同構築が可能な現実」といっているものは、ギディンスが言説の中で現れる「私」や「あなた」の推論的意識 (discursive consciousness) [筋の通るように論題から論題へと話を進めていく時の意識] と言っている領域のことである。また、私が「言語共同体にとっての現実」といっているものは、ギディンスが慣行的意識 (practical consciousness) と言っている領域のことである。そして、私が「対話や解釈の方法では捉えられない領域」といっているのは、ギディンスが無意識と言っている領域のことである。だから、対話というのは単に異なる意識の遭遇ではなく、異なる構造化の中で活動する異なる行為主体 (Agents) どうしの遭遇に他ならない。もし、本当の沈黙を生む最終的な相互理解が可能ならば、両行為主体は同じ構造を生産し再生産していることになる。ガタマーが人間形成 (Bildung) としての解釈と呼んだ事態は本当はこうした場合に起こるのだろう。しかし、こうしたことは暗黙知を共有する「実践の共同体」の中でしか起こりようがなく、「他者」への対話的インタビューやテキストの読みといった過程では生じようがない。異なる慣行的意識に支えられた異なる文化伝統にある聞き手と話者とが、対話の中で融合しうる地平はたかだか言説化可能な活動／意識の領域に他ならない。

参考文献

- Addison, R.B., 1989, "Grounded Interpretive Research: An Investigation of Physician Socialization" in M.J.Packer & R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 39-57.
- , 1999, "Grounded Hermeneutic Editing Approach", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks.California, 145-161.
- Attride-Stirling, J., 2001, "Thematic networks: an analytic tool for qualitative research", *Qualitative Research*, 1(3):385-405.
- Benner, P., (eds.)1994, *Interpritive Phenomenology—Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, Sage, London.
- Birus, H., 1986, *Hermeneutische Positionen*, Gottingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 竹田・三国・横山 訳, 1987, 「解釈学とは何か」山本書店.
- Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism : Perspective and Method*, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, Inc. 後藤将之訳「シンボリック相互作用論：パースペクティブと方法」, 草書房 1991.
- Bogdan, R., & S.J.Taylor, 1975, *Introduction to qualitative research methods*. New York: Jhon Wiley.
- Bollnow, O.F., 1949, *Das Aufstze zur Theorie der Geisteswissenschaften*, Mainz: Kirchheim Verlag. 小笠原道雄・田代尚弘訳, 1978, 「理解するということ」以文社.
- Borkan, J., 1999, "Immersion/Crystallization, in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 179-194.
- Boyatizis, R.E., 1973, *Alcohol and aggression: A study of the interaction*. Unpublished final report on Contract No. HMS-42-72-178, submitted to the National Institute of Alcohol Abuse and Alcoholism. Rockvill, MD.
- , 1974, "The effect of alcohol consumption on the aggressive behavior of men", *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, 35:959-972.
- , 1975, "The predisposition toward alcohol-related interpersonal aggression in men",

- Journal of Studies on Alcohol, 36:1196-1207.
- , 1983, "Who should drink what, when, and where if looking for a fight", in E.Gottheil, K.A.Druley, T.F.Skoloda, & H.M.Waxman (eds.) Alcohol, drug abuse and aggression. Springfield, IL:Charles C Thomas. 314-329.
- , 1998, Transforming Qualitative Information, Sage Thousand Oaks, California.
- Braun, V., & V.Clarke, 2006, "Using thematic analysis in psychology", Qualitative Research in Psychology, 3:77-101.
- Bulmer, M.I.A., 1975, "Sociological Models of the Mining Community," Sociological Review, 23:61-92.
- Clarke, A.E., 2003, "Situational Analyses: Grounded Theory Mapping After the Postmodern Turn, Symbolic Interaction, 26(4):553-576.
- Charmaz, K., 1995, "Between Positivism and Postmodernism: Implications for Methods," Studies in Symbolic Interaction, 17:43-72.
- Charmaz, K., 2000, in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, Handbook of Qualitative Research, second edition, Thousand Oaks, Sage Publications. 藤原顯訳「質的ハンドブック2巻:質的研究の設計と戦略」北大路書房.
- Charmaz, K., 2006, Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis, Thousand Oaks, CA:SAGE Publications.
- Crabtree, B.F., & W.L.Miller, 1999, "Using Codes and Code Manuals: A template organizing style of interpretation", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), Doing Qualitative Research, Sage, Thousand Oaks, California, 163-177.
- Crotty, M., 1996, Phenomenology and Nursing Research. Churchill Livingstone, Melbourne.
- , 2003, The Foundations of Social Research, Sage, London.
- Dey, I., 1999, Grounding Grounded Theory. San Diego: Academic Press.
- Dilthey, W., 1914, Gesammelte Schriften, Bd. I, Stuttgart, 山本英一・上田武訳1981,「精神科学 序説:社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み」以文社.
- , 1946, Die Philosophie des Lebens. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910, hrsg. von Herman Nohl. Vittorio Klostermann, 久野昭監訳「生の哲学」, 1987, 以文社.
- , 1957, Gesammelte Schriften, Bd. V, Stuttgart, 317~331, 久野昭訳, 1973,「解釈学の成立」以文社.
- Douglas, J., 1970, "Understanding everyday life" in J.Douglas (eds.) Understanding Everyday Life Aldine Publishing Company, Chicago.
- Douglass, B.G., & C.Moustakas, 1985, "Heuristic Inquiry: The internal search to know", Journal of Humanistic Psychology, 25(3):39-55.
- Dowling, M., 2007, "From Husserl to van Manen, A Review of Different Phenomenological Approaches" International Journal of Nursing Studies, 44:131-142.
- Dreyfus, 1991, Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I, Cambridge, MA., Massachusetts Institute of Technology. 門脇監訳「世界内存在一『存在と時間』における日常性の解釈学」産業図書.
- Feredy, J., & E.Muir-Cochrane, 2006, "Demonstrating Riger Using Thematic Analysis: A Hybrid Approach of Inductive and Deductive Coding and Theme Development", IJQM, 5(1):1-10.
- Flick, U., 1995, Qualitative Forschung, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch Verlag. 小田博志他訳「質的研究入門」, 2002, 春秋社.
- Gadamer, H.G., 1975, Wahrheit und Methode Grundzüge einer pilosophischen Hermeneutik, J.C.B. MOHR, Tübingen. 轡田収・卷田悦郎他, 1986, 2008,「真理と方法I・II」法政大学出版会.
- Giorgi, A., 1970, Duquwsne Studies in Phenomenological Psychology:Volume I, Duquesne

- University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房, 1985.
- , 1976, *Phenomenology and the Foundation of Psychology*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA. 早坂泰次郎監訳「心理学の転換」・草書房, 1985.
- , 1985, “Sketch of a Psychological Phenomenological Method”, in A.Giorgi (eds.) *Phenomenology and Psychological Research*, Duquesne University Press. Pittsburg, PA.
- , 1992, “Description versus Interpretation : Competing Alternative Strategies for Qualitative Research”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 23(2):119-135
- , 1997, “The Theory, Practice, and Evaluation of the Phenomenological Method as a Qualitative Research Procedure”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 28(2):236-260.
- , 1999, “A Phenomenological Perspective on Some Phenomenographic Results on Learning”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 30(2):68-93.
- , 2000a, “The status of Husserlian phenomenology in caring research”, *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:3-10.
- , 2000b, “Concerning the application of phenomenology to caring research” *Scandinavian Journal of Caring Science*, 14:11-15.
- , 2002, “The Question of Validity in Qualitative Research”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 33(1):1-18.
- , 2004, “A Way to Overcome the Methodological Vicissitudes Involved in Researching Subjectivity”, *Journal of Phenomenological Psychology*, 35(1):1-25.
- , 2006, “Difficulties Encountered in the Application of the Phenomenological Method in the Social Science”, *Análise Psicológica*, 30(4):353-361.
- Glaser, B.G., & A.L.Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory : Strategies for Qualitative Reserach*, Chicago:Aldine Publishing Company, 後藤, 人出, 水野訳「データ対話型理論の 発見」, 1996, 新曜社.
- Glaser, B.G., 1978, *Theoretical Sensitivity*, Mill Valley, CA: The Sociology Press.
- Glaser, B.G., 1992, *Basics of grounded theory analysis: Emergence vs foecing*. Mill Valley, CA: Sociology Press.
- Glaser, B.G., 1998, *Doing grounded theory: Issues and discussions*. Mill Valley, CA: Sociology Press.
- Glaser, B.G., 2002, “Conceptualization: On Theory and Theorizing”, *International Journal of Qualitative Methods*, 1(2):1-31.
- Guba, E.G., 1978, *Toward a methodology of naturalistic inquiry in educational evaluation*. Monograph8. Los Angeles: UCLA Center for the Study of Evaluation.
- Gurwitsch, A., 1964, *The Field of Consciousness*, Duquwsne University Press, Pittsburgh.
- Haas, P.M., 1992, “Introduction: epistemic communities and international policy coordination”, *International Organizayion*, 46(1):1~35.
- Hayes, N., 1997, “Theory-led thematic analysys: Social identification in small companies”, in N.Hayes (eds.) *Doing qualitative analysis in psychology*, Hove: Psychology Press.
- , 2000, *Doing Psychological Research*, New York: Open University Press.
- Heidegger, M., 1935, *Sein unt Zeit*, Halle: Max Niemeyer. 原佑・渡辺二郎訳, 2003, 「存在と時間」中央公論社.
- Holroyd, C., 2001, “Phenomenological Research Method, Design and Procedure: A phenomenological investigation of phenomenon of being-in-community as experienced by two individuals who have participated in a Community Building Workshop” *Indo-Pacific Journal of Phenomenology*, 1(1):1-12.
- Husserl, E., 1950, *Ideen—Zu einer reinen Phänomenologie und pänomenologischen Philosophie*.

- Erstes Buch, Martinus Nijhoff, Haag. 渡辺二郎訳 1976 | イデーン I | みすず書房.
- 伊賀光屋, 1986, | モンタージュ 鑪屋 | 新潟大学教育学部紀要, 28(1):79-97頁.
- , 1997, | 参与観察『蔵』—蔵人の労働と生活 | 新潟大学教育学部紀要, 36(1):129~147頁.
- , 2000, | 産地の社会学 | 多賀出版
- , 2003, | 出稼ぎから通勤へ—新潟県越路町の酒造出稼ぎの変化 | 日本労働社会学 会年報 第14号, 103~125頁.
- , 2005, | 品質構築のためのフレーミングとディカップリング—『有りがたし』のフレーミングと『よしかわ杜氏の郷』のアクター・ネットワーク— | 新潟大学教育人間 科学部紀要, 7(2):181~196頁.
- , 2005, | 外部スターによる工業的品質の構築と経路依存からの脱却—『加藤酒造』 融米造り | 新潟大学教育人間科学部紀要, 8(1):49~64頁.
- , 2006, | 職業コミュニティへと取り込まれる過程—杜氏になる— | 新潟大学教育 人間科学部紀要, 8(2):171-182頁.
- , 2006, | 企業コミュニティに埋め込まれた知識—朝日酒造の酒造技術— | 新潟大学教育人間科学部紀要, 9(1):61-85頁.
- , 2007, | 語りの中の職業コミュニティ—峯村杜氏のインビボ・コード— | 新潟大 学教育人間科学部紀要, 9(2):241-276頁.
- , 2007, | 酒屋仲間と酒造コミュニティ | 新潟大学教育人間科学部紀要, 10(1):21-32頁.
- 石川求, 2005, | 対話とはなにか—ガーマー拾遺— | 思想 No.974:47-64.
- Islam, N., 1983, "Sociology, Phenomenology and Phenomenological Sociology", *Sociological Bulletin*, 32(2):134-452.
- King, N., 1998, "Template Analysis", in G.Symon & C.Cassell (eds.), *Qualitative Method and Analysis in Organizational Research: A practical guide*. London, Sage. 118-134.
- 小池稔, 1979, | 現象学と解釈学 (I) | アルテス・リベラレス第25号:1-20.
- , 1980, | 現象学と解釈学 (II) | アルテス・リベラレス第27号:1-17.
- , 1983, | 現象学と解釈学 (III) | アルテス・リベラレス第33号:1-15.
- , 1985, | 現象学と解釈学 (IV) | アルテス・リベラレス第36号:1-14.
- , 1988, | 現象学と解釈学 (V) | アルテス・リベラレス第43号:1-21.
- Lincon, Y.S., & E.G.Guba, 1985, *Naturalistic inquiry*. Beverly Hills, CA:Sage.
- Mall, R.A., 1993, "Phenomenology—Essentialistic or Descriptive?", *Husserl Studies*, 10:13-30.
- McPhail, C., & C.Rexroat, 1979, "Mead vs. Blumer: The Divergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism", *ASR*, 44:449-467.
- Miller, W.L., & B.F.Crabtree, 1999, "Clinical Research: A multimethod typology and qualitative roadmap", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 3-30.
- , 1999, "The Dance of Interpretation", in B.F.Crabtree & W.L.Miller (eds.), *Doing Qualitative Research*, Sage, Thousand Oaks. California, 127-143.
- Mills, J., A.Bonner, & K.Francis, 2006, "The Development of Constructivist Grounded Theory" *International Journal of Qualitative Methods*, 5(1):
- Mills, M.B. & A.N.Huberman, 1994, *Qualitative Data Analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.) Sage, Newbury Park, CA.
- Moustakas, C., 1961, *Loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall.
- , *The touch of loneliness*. Englewood Cliffs, NJ.: Prentice-Hall.
- , 1990(a), *Heuristic Research: Design, methodology and applications*, Sage, Newbury Park, CA.
- , 1990(b), *Heuristic Research: Design and methodology*, *Person-Centered Review*,

- 5(2):170-190.
- , 1994, *Phenomenological Research Methods*, Sage, Thousand Oaks. California.
- Packer, M.J., 1985, "Hermeneutic inquiry in the study of human conduct", *American Psychologist*, 40:1081-1093.
- , 1989, "Tracing the Hermeneutic Circle: Articulating an ontical study of moral conflicts", in M.J.Packer & R.B.Addison, (eds.) *Entering the Circle*, State University of New York, Albany, N.Y., 95-117.
- , 1989, Packer M.J., & R.B.Addison, 1989," Evaluating an interpretive account", in Packer M.J., & R.B.Addison (eds.), *Entering the Circle: Hermeneutic investigation in psychology*, Albany, State University of New York Press. 13-36.
- , 1991, "Interpreting Stories, Interpreting Lives: Narrative and Action in Moral Development REsearch", in M.B.Tappan & M.J.Packer (eds.), *Narrative and Storytelling: Implication for Understanding Moral Development*, *New Directions for Child Development*, 54:63-82.
- , 2000, "An Interpretive Methodology Applied to Existential Psychotherapy", *Methods Annual Edition*, 493-514.
- Palmer, R.E.1969, *Hermeneutics: Interpretation theory in Schleiermacher, Dilthey, Heidegger and Gadamer*. Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Patton, M.Q., 1990, *Qualitative evaluation and research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Pollio, H.R. & M.J.Ursiak, 2006, "A Thematic Analysis of Written Accounts: Thinking about Thought", in C.Fischer (eds.) *Qualitative research methods for psychologists: introduction throug empirical studies*. Elsevier: Academic Press.
- Rennie, D.L., 1998, "Grounded Theory Methodology: The Pressing Need for a Coherent Logic of Justification" *Theory & Psychology*, 8(1):101-119.
- , 2007, "Hermeneutics and Humanistic Psychology", *The Humanistic Psychologist*, 1:1-26
- Rennie, D.L., & K.D.Fergus, 2006," Embodied Categorizing in the Grounded Theory Method", *Theory & Psychology*, 16(4):483-503.
- Ryan, G.W., & H.R.Bernard, 2003, "Techniques to Identify Themes", *Field Methods*, 15(1):85-109.
- Ryan, G.W., & T.Weisner, 1996, "Analyzing words in brief descriptions: Fathers and mothers describe their children", *Cultural Anthropology Methods Journal*, 8(3):13-16.
- Schleiermacher, F., 1998, *Hermeneutics and Criticism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Silverman, D., 1993, *Interpreting Qualitative Data: Methods for analysing talk, text and interaction*. London:Sage.
- Silverman, H., 1987, *Inscription: Between Phenomenology and Structuralism*. Routledge Kegan Paul, New York.
- Smith, J.A., 2003, *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*. London, Sage.
- , 2004, "Reflecting on the development of interpretative phenomenological analysis and its contribution to qualitative research in psychology", *Qualitative Research in Psychology*, 1:39-54.
- Smith, J.A., R.Harré, & L.Van Langenhove, 1995, *Rethinking Psychology*. London, Sage.
- Smith, J.A., & M.Osborn, 2003, "Interpretive phenomenological analysis", in J.A.Smith (eds.), *Qualitative psychology: a practical guide to research methods*, London: Sage, 51-80.
- Spiegelberg, H., 1982, *The Phenomenological Movement*, Martinus Nijhoff, Hage, 立松弘孝監訳「現象学運動」世界書院.
- Strauss, A.L. & J.Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*, Thousand Oaks, California, Sage Publications, 1998, 操, 森岡訳

- 「質的研究の基礎」, 1999, 医学書院.
- , 1994, “Grounded Theory Methodology,” in N.K.Denzin, & Y.S.Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*, Thousand Oaks, Sage Publications.
- Strauss, C., & N.Quinn, 1997, *A cognitive theory of cultural meaning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Tiryakian, E., 1965, “Existential phenomenology and sociology” *ASR*, 30:674-688.
- Turner de Sales, 2003, “Horizons Revealed: From Methodology to Method”, *International Journal of Qualitative Methods*, 2(1):1-32.
- Van Maanen, J., & S.R.Barley, 1984, “Occupational communities: culture and control in organizations”, *Research in organizational behavior*, 6:287~365.
- Van Maanen, J. 1988, *Tales of the Field: On Writing Ethnography*, Chicago, The University of Chicago Press.
- Van Manen, M., 1990, *Reseaching Lived Experience – Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*, State University of New York Press. London Ontario, Canada.
- , 2002, *Phenomenology Online*, <http://www.phenomenologyonline.com/>